

## 政務調査視察 報告書

報告者：鈴木 静男

視 察 日	平成24年11月13日（火）
視 察 内 容	産業まちづくり大賞について
視 察 者	田口 正夫、築瀬 太、三浦 康宏、杉浦 久直、鈴木 静男

### <姫路市の概要>

姫路市は兵庫県南西部、播磨平野の中央に位置し、播磨灘に臨む。風土記が残るなど古くから栄え、池田輝政の姫路城築城により城下町として繁栄。1889年に全国30市とともに日本で初めて市制施行。戦後は播磨臨海工業地帯として発展し、96年に中核市に移行。

面積：534.44 k m<sup>2</sup>

人口：536,270人



### <産業観光への取り組み概要>

産業観光とは歴史的・文化的価値のある工場等やその遺構、機械器具、最先端の技術を備えた工場等を対象とした観光で、学習や体験を伴うもの。

従来の観光地を巡る物見納め的な観光から地域独自の魅力を活かした体験型観光・交流型観光へのニーズの高まりに対応。また、地域の産業について深く知り、交流したいといった観光客のニーズへ対応。ものづくりへの現場への関心が高まっている現状を取り入れた観光。

- H20 産業観光を紹介するポスター・パンフレットを製作配布
- H20・21 産業観光モニターツアーの実施
- H20・21 旅行事業者向けに産業観光バス助成事業の実施
- H23・2月 全国産業観光フォーラムの開催
- H23・春 姫路城大天守保存修理に伴う見学施設公開「天空の白鷺」
- H23・10月 姫路市工場夜景ツアー事業化

### <姫路城大天守保存修理事業の産業観光への取り組み>

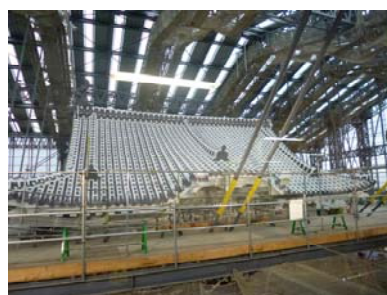
姫路市の中心的な観光資源である姫路城が大天守保存修理により大天守が見えなくなり、大天守内部に登ることができなくなるなど、観光面でマイナスが発生。しかし、逆転の発想で保存修理事業を新たな観光資源にしようとした。

- ・修理現場を常時公開
- ・修理を支える職人やその技を紹介（関連工場見学・体験会開催など）

以上の効果として

- ・登閣者減少抑制。
- ・姫路城のファン、リピーターの増加。
- ・城を支えてきた地場産業の観光展開。
- ・長期的な職人の人材育成、職人との交流。

また、姫路には伝統の技を伝える瓦工場や仏壇工場、製鎖工場などがあり、城下町文化をよる酒蔵や菓子工場などもあり、見学や体験の受け入れを行っている。



### <産業観光への取り組み効果>

#### ・企業にとっての産業観光のメリット

企業として社会的責任・社会貢献の一環として考え、企業イメージの向上へつながり産業観光に取り組む姿勢が評価される。製造・修理作業を公開することで消費者からの信頼感を醸成することへつながる。また、工場見学でものづくりの心にふれた子供たちが将来その企業へ就職したり顧客となる可能性もある。さらに外部者と交流することのない従業員が見学者と交流することにより就労意識向上へつながるといったメリットがある。

#### ・行政にとっての産業観光のメリット

産業観光を通じて企業と地域が密接に結びつくことで、企業の地域からの流出や海外移転を防ぐ一環となり企業の定着促進をする。それにより、税収確保・税収アップが図られる。また、広く地域住民に産業観光を通じて地元産業を知ってもらえば地域ブランド力アップとなる



### [感想・岡崎市への反映]

姫路市では姫路城大天守保存修理事業を見据え、行政・商工会議所・企業・地域市民団体など連携しての産業観光事業への取り組みにとっても高い評価があります。古くから地域に根差した伝統産業へ視点を向け、地域市民のみならず観光客へも体験・交流型観光を促した点においては伝統産業と近代産業とのコラボレーションも高く評価されています。

観光都市をめざす本市としても、市内の歴史的観光施設への観光客誘致のみならず、それらと融合した地場産業観光や、岡崎の伝統的なものづくりの石工産業や仏壇産業・花火産業などから最先端産業までを紹介し体験・交流型観光である産業観光を促進していくことが必要ではと考えます。またそうすることで、岡崎ブランドの育成へつながり観光と産業が同時に発展していくと考えます。

## 政務調査視察 報告書

報告者：三浦 康宏

視 察 日	平成24年11月14日（水）
視 察 内 容	四番町スクエアについて
視 察 者	田口正夫、築瀬 太、鈴木静男、杉浦久直、三浦康宏

### <彦根市の概要>

彦根市は滋賀県北東部に位置し、琵琶湖と鈴鹿山系に囲まれた豊かな自然に恵まれ、歴史的、文化的な風情を色濃く留めると共に、中世から近世にかけての歴史遺産が数多く存在する一方、機械系業種を中心とする工業都市でもあり、近畿で唯一の定住自立圏構想の中心市。12年2月に市制75周年を迎えた。

07年開催の「国宝・彦根城築城400年祭」のキャラクターとして誕生した「ひこにゃん」は全国的な人気を博し、ゆるキャラブームの火付け役となった。

面積：196.84 k m<sup>2</sup> 人口：112,156人



### <都市再生土地地区画整理事業の概要>

昭和57年3月に第一種市街地再開発事業基本構想が策定されて以来、行政主導で進められてきた本町市場商店街再開発計画が諸処の事情により衰退し行き詰まり、平成9年3月、彦根市中心市街地再生事業委員会の提言を受ける形で、検討されてきた事業の見直しを余儀なくされる。そんな中、強い危機感を抱いた若手の商店主ら12名が平成8年に「檄の会」を結成し、行政に頼らない新たな街づくりを提言、独自の再生活動をスタートさせる。「檄の会」では夜を徹して通称D地区に商業集積を図るための研究を重ね、平成11年8月、彦根市本町土地地区画整理組合を設立した。これには地域住民の熱い思いを乗せて、単に換地による土地の再分配で建物を建て替えるだけでなく、中心市街地の商店街として賑わいの再生を目指したより高度のまちづくりが必要であるという考えに基づき、同一組合員による「本町地区共同整備事業組合」を組織し、区画整理事業では処理しきれない事業についても取り組むこととなった。地区の商店構成は予めゾーニング計画により制定した業種配置とし、テナントについてもある程度の業種制限を取り入れた。

平成12年7月、まちづくりに関する協定書を制定。総会ではこの街の基本コンセプトを大正ロマンと決定するまちづくり協定が、「福祉のあるまちづくり基準」や「建築・景観ルールブック」と共に決定された。これにより統一感のある町並みが形成され、賑わいの核づくりにも取り組んでいる。人口減少が顕著な中心市街地商店街の再生には、商圏の拡大と観光客を主とした外来者の来訪を期待することとし、以後事業の進捗に合わせ、全国へのアピールに力を入れている。



### <「四番街スクエア」の現状と課題>

前述の事業の結果、平成15年に設立されたまちづくり会社「株式会社四番町スクエア」は平成17年に市や地元企業、地元金融機関の出資を得て第三セクターとなり、平成17年に「ひこね街なかプラザ」を整備、平成19年には「食」のテーマ館として「ひこね食賓館四番町ダイニング」を完成させ、情報発信と「食」を2本柱にした賑わいの再生を目指し、まちの整備、運営を図っている。

その成果が、ゴーストタウン化していた商店街を見事に再生活活性化した例として、市内は元より全国から多くの人々が訪れ、都市景観大賞「美しいまちなみ優秀賞」、土地活用モデル大賞「国土交通大臣賞」ほか多くのまちづくりに関する受賞を得ている。因みに当初客層の比率は地元8：観光客2であったが、現在は4：6となっている。

そして平成22年までは右肩上がりに伸びていた来訪者数もここ数年は減少傾向にあり、現在はもう1度地元主体の集客に力点を置くべく、100円ショップの出店等、新たな展開に着手している。



### [感想・岡崎市への反映]

まず言及すべきは今回ご説明・ご案内を頂いた四番町スクエア「ひこね街なかプラザ」西村武臣さんの「熱さ」だ。行政主導の再開発計画の見直しから「檄の会」を束ね、最終的に民間と行政を繋ぎ一連の再生事業に漕ぎ着けたその情熱と行動力には感服しきりだった。まずは地域商店主・住民と徹底的に議論し方向性を定め、そこに市だけでなく国の支援も絡めて官民一体の渦をつくり、そこに地元の人々を巻き込んで見事な地域再生事業を実現したその根幹は、正にその中心となり、率先して昼夜を問わずその目的達成のために尽力した西村さんの存在があってこそだと思う。

またその西村さんが事業の成功には「担当職員の熱心さがあったからこそ、彼と2人3脚で計画を進められた。そしてそこに市長自らの熱心な協力があったことが大きかった」と話していたのが印象的だった。

岡崎市にも康生地区ほか多くの賑わいを失った商店街が存在するが、その再生計画の中心には、必ずその当該地区、地元の人々の熱意が必要不可欠であることを改めて感じると共に、その意を汲んで目的達成のための確にサポートを加える行政側の熱意と手腕もまた重要な要素であることを学んだ。

それぞれの商店街に於いて、十分なコミュニケーションを図った上での、その地域の住民の意向に沿った再生計画を官民一体となって進めて行きたい。